**◎夏目漱石の手紙**

●漱石経歴：

・1867年（慶応３年）2月9日生れ。

・1894年（明治27年）12月末から翌年1/7まで**円覚寺で坐禅**。

・1895年（明治28年）愛媛県尋常中学校に赴任。

・1896年（明治29年）熊本の第五高等学校に赴任。

・1900年（明治33年）9/10に日本を発ちロンドンへ向かう。

・1903年（明治36年）1/20、ロンドンから帰国。

　　　　　　　　　　 ４月、東京帝国大学の講師。

『吾輩は猫である』（明治38-39年）、『坊ちゃん』（39年）

・1907年（明治40年）2月、一切の教職を辞し、朝日新聞に入社。

『三四郎』（明治41年）、『それから』（42年）、『門』（43年）

・1910年（明治43年）8月「**修善寺の大患**」、死にかける。

『こころ』（大正3年）、『道草』（4年）、『明暗』（5年）

・1916年（大正５年）12月9日没。

●1906年（明治39年）2/13。森田草平宛て。

**君、弱い事をいってはいけない。**

**僕も弱い男だが弱いなりに死ぬまでやるのである。やりたくなくったってやらねばならん。君もその通りである。**死ぬのもよい。しかし死ぬより美しい女の同情でも得て死ぬ気がなくなる方がよかろう。

●2/14。森田草平宛て。

**天下に己れ以外のものを信頼するよりなきはあらず。**

**しかも己れ程頼みにならぬものはない。**

**どうするのがよいか。**

森田君、君この問題を考えた事がありますか。

●2/15。森田草平宛て。

**すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分からないのである**。

**君なども死ぬまで進歩するつもりでやればいいではないか。作に対したら一生懸命に自分のあらん限りの力をつくしてやればいいではないか**。…

**何故に委縮するのである**。

今日大なる作物が出来んのは生涯出来んという意味にはならない。たとい立派なものが出来たって世間が受けるか受けないかそんな事はだれだった受け合われやしない。**ただやるだけやる分の事である**。

●7/3。高浜虚子宛て。

小生は生涯に文章がいくつかけるかそれが楽しみに候。また喧嘩が何年出来るかそれが楽しみに候。

**人間は自分の力も自分で試して見ないうちは分らぬものに候**。

握力などは一分でためす事が出来候えども自分の忍耐力や文学上の力や強情の度合いやなんかはやれるだけやって見ないと自分で自分に見当のつかぬものに候。

**古来の人間は大概自己を充分に発揮する機会がなくて死んだろうと思われ候。惜しい事に候。機会は何でも避けないで、そのままに自分の力量を試験するのが一番かと存候**。

●10/23。狩野亨吉宛て。

狩野さんから手紙が来た。

そこで何の用事かと思って開いて見たら用事ではなくただの通信であった。それで僕は驚いた。

僕は狩野さんという人は用事がなければ手紙をかく人ではない、しかもその手紙たるや官庁の通牒的なものに限ると思っていたのだから驚いた。

この手紙は僕のかきそうな手紙で毫も用事がなければ手紙を書く人ではない、しかもその手紙たるや官庁の通牒的なものに限ると思っていたのだから驚いた。

この手紙は僕のかきそうな手紙でも毫も用事がないから不思議なものだと思った。

狩野さんがよっぽど閑日月が出来たか然らずんば京都の空気を吸って突然文学的になったんだと断定した。それはどうしてなっても構わん。狩野さんが僕の畠の方へ近付いて来たのだから不平はないのみならず甚だ嬉しいという感じで読んだ。狩野さんがもしこんな人間なら僕もこれからはこんな手紙をかいて送ろうかと思った。

何でも君が僕の夢を見た事がある。そうして僕が養母とその娘といて穴八幡があって、養母の名が仲であるという夢は実際妙である。ことに『日本新聞』にあんな事が出たのを知らないで見たのだからいよいよ妙だ（僕も『日本新聞』はあとから注意されて見た）妙は妙であるがこれは余り予想外であるから妙なのである。元来夢について僕はこう思っている。人はよく平生思っているものを夢にみるというが僕の考では割合からいうと思わないものを見る方が多い。昔僕がある女に惚れてその女の容貌を夢に見たいと見たいと思って寝たが何晩かかっても遂に一度も見なかったのでもわかる。狩野さんも僕の事を思っていたから見たのじゃなかろう。虚心平気の所へ僕と養母と娘が出現したのだろう。しかしそれが新聞と暗合しているから不思議だ。元来夢というものに限らず何も予期しないで行雲流水の趣でみていると甚だ愉快なものだ。拘泥する途端に凡てをぶち壊してしまう。僕のような人間は君ほど悟っていないからややともすると拘泥していけないが、夢だけは自由自在で毫も自分に望も予期もないから甚だ愉快だ。どんな悪夢を見てもどんな罪な夢を見ても自然の極致を尽くしているから愉快だ。実世界では人間らしく振舞っていてもチョイチョイ拘泥する所が自分にあるからかえって醜悪な感じがする。

京都はいい所に違いない。ことに今頃松茸などを連想すると行きたくて堪らない。君の事だからよく散歩をするだろうと思う。それから絵や古書や骨董などもあるだろう。一体がユッタリして感じがいいだろう。そんな点では東京と正反対だろう。僕も京都へ行きたい。行きたいがこれは大学の先生になって行きたいのではない。遊びに行きたいのである。

**自分の立脚地からいうと感じのいい愉快の多い所へ行くよりも感じのわるい、愉快の少ない所におってあくまで喧嘩をして見たい。これは決してやせ我慢じゃない。**

**それでなくては生甲斐のないような心持がする。何のために世の中に生まれているかわからない気がする。**

**僕は世の中を一大修羅場と心得ている。そうしてその内に立って花々しく打死をするか敵を降参させるかどっちにかして見たいと思っている。**敵というのは僕の主義、僕の主張、僕の趣味から見て世のためにならんものをいうのである。世の中は僕一人の手でどうもなりようはない。ないからして僕は打死をする覚悟である。

**打死をしても自分が天分を尽くして死んだという慰藉があればそれで結構である。**

**実をいうと僕は自分で自分がどの位の事が出来てどの位な事に堪えるのか見当がつかない。**

**ただ尤も烈しい世の中に立って（自分のため、家族のためは暫らく措く）どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となって未来の青年の肉や血となって生存し得るかをためして見たい。**

京都へ行きたいというのはこの仕事をやる骨休みのために行きたいので、京都へ隠居したいという意味ではない。

考えて見ると僕は愚物である。大学で成績がよかった。それで少々の自負の気味であった。そんなら卒業して何をしたかというと蛇の穴籠りと同様の体で十年余りをくらしていた。僕が何かやろうとし出したのは洋行から帰って以後であって、それはまだ三、四年に過ぎぬ。だから僕は発心してからまだほんの子供である。

もし僕が何か成す事があればこれからである。そして何か成し得るような状況に向かったのは東京で今の地位（学校の地位ではない）を得たからである。だからして僕の事業はこの地位と少なからざる関係を有している。**この地位を捨てて京都へ行って安閑としているのは丁度熊本へ這入って澄ましていたと同様になる。これは少し厭である**。

無論人事は大観した点からいえばどうでもよいのである。ダーウィンも車夫も同じ事である。不義の者に頭を下げるのも伯夷淑叔斉のような意地を通すのもつまりは一つである。大学の教授も小学校の先生も同じ事である。一歩進めていえば生きても死んでもそんなに変わりはない。しかししばらく世間的の見地に住して差別観の方からいうと大に趣が違う。僕の東京を去るのは決してよくはない。

教授や博士になるならんは瑣末の問題である。夏目某なるものが伸ばすか縮むかという問題である。夏目某の天下に与うる影響が広くなるか狭くなるかという問題である。だからして僕は先生としては京都に行く気はないよ。

尤も煎じつめればどうでもよいのだからこっちで免職になれば自殺する前に京都に行く。京都でいけなければ北海道でも満州でも行く。要は臨機応変拘泥してはいけない。臨機応変の極腹を切って死ぬかもしれない。それでも構わないが、先ず今の状況なら京都行は御免だ。

しかし近来のように刺激が多くて神経が衰弱して眠くばかりなっては大事業も駄目らしいから来年の春頃になったら金をこしらえて二週間ばかり京都へでも遊びに行きたいと思っている。これも臨機応変だからどうなるか分からない。以上。

金之助

狩野兄

●10/23。狩野亭吉あて。

［前略］御存じの如く僕は卒業してから田舎へ行ってしまった。これには色々理由がある。理由はどうでもよいとして、この田舎行きはいわゆる大乗的に見れば東京にいると同じ事になる。しかし世間的にいうと甚だ不都合であった。

僕の出世のために不都合というのではない。僕が世間の一人として世間に立つ点から見て大失敗である。

というものは当然僕をして東京を去らしめたる理由のうちに下の事がある。――世の中は下等である。人を馬鹿にしている。汚い奴が他という事を顧慮せずして衆を恃み勢に乗じて失礼千万な事をしている。こんな所にはおりたくない。だから田舎へ行ってもっと美しく生活しよう――これが大なる目的であった。

然るに田舎へ行って見れば東京同様の不愉快な事を同程度において受ける。その時僕はシミジミ感じた。僕は何が故に東京へ踏み留まらなかったか。彼らがかくまでに残酷なものであると知ったら、こちらも命がけで死ぬまで勝負をすればよかった。…

これではいかぬ。もしこれからこんな場合に臨んだならば決して退くまい。否進んで当の敵を打ちしてやろう。いやしくも男と生れたからにはそれ位な事はやればやれるのである。やれるのに自己の安逸を貪るために田舎まで逃げ延びたればこそ彼らをして増長せしめたのである。あたかも冷水浴の刺激がいやだからといって因循に夜具のなかにもぐり込むようなものである。己れのあり余る力を使用せんで故意に屏息すると同様なものである。

――**余は当時ひそかにこう決心した**。それから熊本に行った。…

しかし今の僕は松山で行った時の僕ではない。僕は洋行から帰る時船中で**一人心に誓った**。どんな事があろうとも十年前の事実は繰り返すまい。**今までは己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかった。己れを信頼した事が一度もなかった。朋友の同情とか目上の御情とか、近所近辺の好意とかを頼りにして生活しようとのみ生活していた。**

**これからはそんなものは決してあてにしない。**妻子や、親族すらもあてにしない。

**余は余一人で行く所まで行って、行き尽いた所で斃れるのである。それでなくては真に生活の意味が分らない。手応がない。何だか生きているのか死んでいるのか要領を得ない。余の生活は天より授けられたもので、その生活の意義を切実に味わんでは勿体ない**。

金を積んで番をしているようなものである。金のありたけを使わなくては金を利用したといわれぬ如く、**天授の生命をあるだけ利用して自己の正義と思う所に一歩でも進まねば天意を空うする訳である。余はかように決心してかように行いつつある**。…

●10/26。鈴木三重吉宛て。

世の中は自己の想像とは全く正反対の現象でうずまっている。

　**そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、いやなものでも一切避けぬ、否進んでその内へ飛び込まなければ何にも出来ぬという事である**。…

で『草枕』のような主人公ではいけない。あれもいいがやはり今の世界に生存して自分のよい所を通そうとするにはどうしてもイプセン流に出なくてはいけない。…

　**僕は一面において俳諧的文学に出入すると同時に一面において死ぬか生きるか、命のやりとりをするような維新の志士の如き烈しい精神で文学をやって見たい。それでないと何だか難をすてて易につき劇を厭うて閑に走るいわゆる腰抜文学者のような気がしてならん**。

◎1916年（大正５年）

●漱石の大正５年11/10宛の手紙

。

のは。ありがとういます。してもしないであんななをいわれてはます。しかしそれが縁になってのに変化すれば私にとってこれほど満足な事はありません。私は日本に一人の知識をえたようなものです。富沢さんもほぼあなたと同様の事をいって来ました。

**坊さん方のなはなものです。どうぞののをえさずにを祈ります。**

**私は私にのにあるだけのとでをめるつもりです。がついてるとすべてらぬばかりです。ともにでちちています。ずかしいです。このにかかるにはもうしいになっていたいといます**。あなたはははほどいます。しかしとかとかいうものはっているだけにあなたのがあります。

　子供にやるはでもいません。ははです。

　さんがをしているというをいってましたからちょっとに入れます。

　まきを割るかはたをるかの

というのです。さんはいのを嫌いましょう。日常坐ったりをいたりしてというがについているでしょう。しかしはまたとかく実力もないのに禅とか何とかりしてたくなるものです。どうもいですね。。

十一月十日

夏目金之助

鬼村元成様

●漱石の大正５年11/15富沢宛の手紙

啓

饅頭を沢山ありがたう。みんなで食べました。いやまだ残ってゐます。是からみんなで平げます。俳句を作りました。

　　饅頭に礼拝すれば　晴れて秋

　　饅頭は食ったと　雁に言伝よ

徳山の故事を思ひ出して

　　吾心點じ了りぬ　正に秋

　　僧のくれし此饅頭の丸きかな

瓢箪はどうしました

　　瓢箪は鳴るか鳴らぬか　秋の風

　副司といふ役は会計をやるんですか面倒でせう。

詩は拝見しました。作務の間に詩作をするのは風流です。然しあなたの詩はまだ旨い所へ行ってゐませんね。昔の人の作例を読んで深い感興が湧きさへすればもっと好い詩が出来る筈だと思ひますが何うですか。是は悪口ぢゃありません。折角遣り出したものだからもっと上手になって欲しいといふ心持です。

　無孔の鉄槌とは何ですか　禅語ですか、ただ上面の意味でも可いから此次序に教へて下さい。

二三日前作った私の詩を書き添へます

　是もまだ改良の餘地があるやうですが専問家でないから好加減な程度であなたに見せる丈です

　**変な事をいひますが私は五十になって始めて道に志ざす事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると大変な距離があるやうに思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禅の専問家ですが矢張り道の修業に於て骨を折ってゐるのだから五十迄愚圖々々してゐた私よりどんなに幸福か知れません。又何んなに特勝［殊勝？］な心掛かわかりません**。

　私は貴方方の奇特な心得を深く礼拝してゐます。あなた方は私の宅へ来る若い連中よりも遥かに尊とい人達です。是も境遇から来るには相違ありませんが、私がもっと偉ければ宅へくる若い人ももっと偉くなる筈だと考へると實に自分の至らない所が情なくなります。

飛んだ蛇足を付け加へました。御勉強を祈ります

　　　以上

十一月十五日

夏目金之助

冨澤敬道様

●10月21日の漢詩

無題

吾失天時併失愚　　　をう、てをう

吾今会道道離吾　　　にい、をる

…

独呑涕涙長躊躇　　　りをんでえにす

怙恃両亡立広衢　　　つながらびてきにつ

無題

元是一城主　　　これの

焚城行広衢　　　をきてきをく

行行長物尽　　　ききてきたり

何処捨吾愚　　　れのにかがをてん

元是錦衣子　　　これの

売衣又売珠　　　をり、またをる

長身無估客　　　し

赤裸裸中愚　　　の

●最後の漢詩 11/20

真蹤寂寞杳難尋　　としてにねく

欲抱虚懐歩古今　　をいてにまんとす

碧水碧山何有我　　　ぞらん

蓋天蓋地是無心　　　これ

依稀暮色月離草　　たる　はをれ

錯落秋声風在林　　たる　はにり

眼耳双忘身亦失　　つながられてもまたい

空中独唱白雲吟　　にりうの